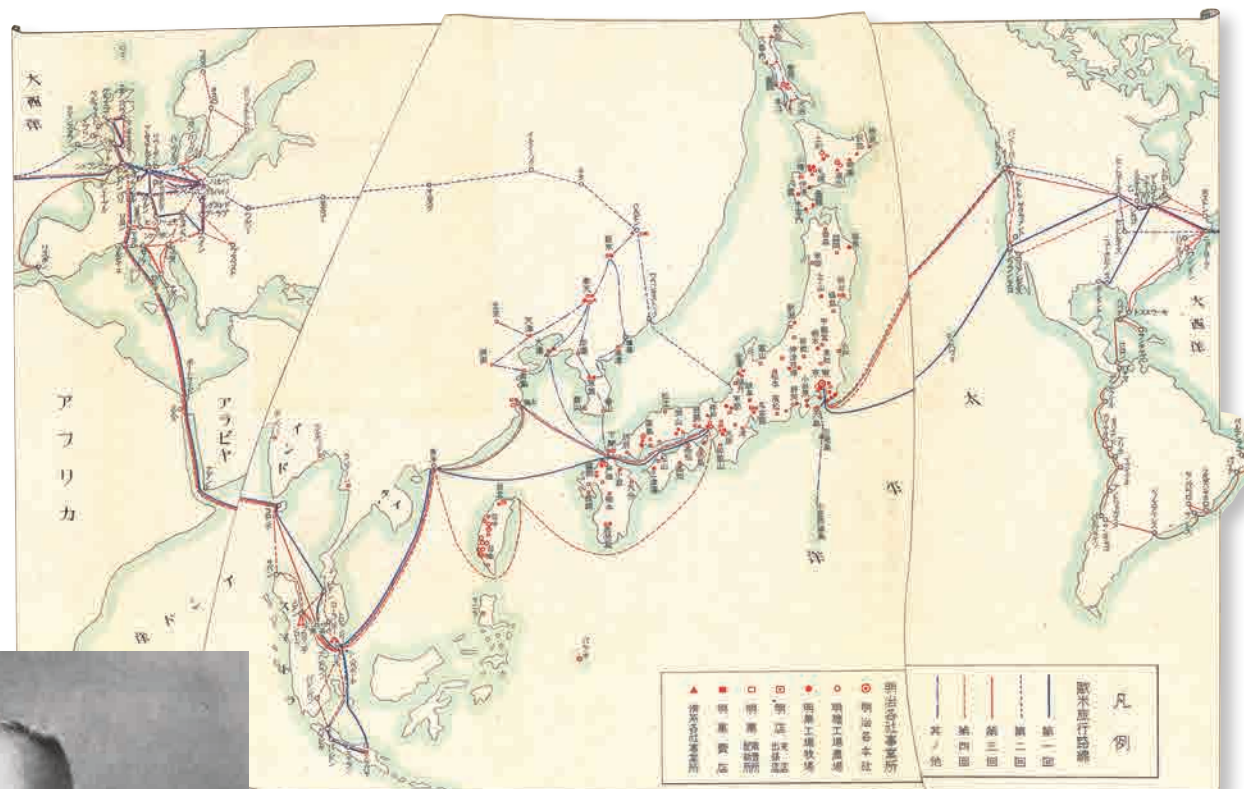


食品文化と栄養への 志のもとに築かれた 明治グループ100年の礎

明治グループは、製糖事業をそのルーツとしている。創業者の1人である相馬半治は明治製糖を設立し、日本や台湾を舞台に広く製糖事業を展開。科学技術を駆使した多角的経営を進める中、有嶋健助とともに国家社会への貢献、食品文化への寄与、栄養報国を志し、製菓業、乳業に参入した。さらにその後、食品事業、薬品事業へも進出していった。



二人三脚で事業基盤を作り上げた
相馬半治(左)と有嶋健助(右)



明治グループ各社の拠点と
相馬半治の視察旅行ルート
出典：「選歴小記」相馬半治

製菓、乳業の事業がスタート
「東京菓子」1916
「極東煉乳」1917
設立



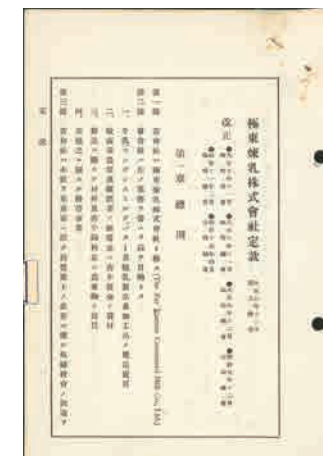
東京菓子



極東煉乳



東京菓子株式会社定款(原本)



極東煉乳株式会社定款(複写)

明治ブランドを全国へ！
「明治商店」設立
1920

グループの商品を取り扱う総代理店として株式会社明治商店を設立。菓子や乳製品などの販売を全国で展開したほか、後に京橋や丸ビルの売店の経営も委託された。その後、薬品を含め販促活動も行った。1942年、明治商事株式会社に変更。



明治商店東京本店

さらなる飛躍を期して
「明治製菓」1924
「明治乳業」1940
に変更



明治製菓



明治乳業

東京菓子は明治製菓株式会社へ、極東煉乳は明治乳業株式会社へ変更。

キャラメル、チョコレート、アイスクリーム……
大規模な最新工場で需要に応える

近代設備を整えた大久保工場、川崎工場では、キャラメル、チョコレート、ビスケットなどを製造。ドイツや米国から技師を招き、製造技術の向上も図った。両国工場では、夏季にアイスクリーム、冬季にはケーキやあんパンなどを製造した。



大久保工場(菓・1917)



川崎工場(菓・1925)



両国工場(乳・1927)

1916-29



関東大震災発生(1923)



世界大恐慌(1929)



丸ビル完成(1923)



銀ブラ、モボ・モガ



東京・浅草～上野間で地下鉄開業(1927)

チョコレートをはじめ 西洋の味を 日本へ届ける！

ドイツから
技師を招いて
技術向上！

“チョコレートは明治”の原点
「ミルクチョコレート」誕生 1926



関東大震災後の新たな風俗文化の波に乗り、チョコレート人気上昇。需要増にともなって新工場(川崎)の建設を進め、量産の体制が整い、1926年9月に「ミルクチョコレート」を20銭で発売。

カルシウム入り
清涼錠菓「カルミン」
1921

ロングセラーとなった
商品の第1号。



子どもたちに大人気のキャラメル
1927

「サイコロキャラメル」(1927)と当時流行した正ちゃん帽を被った男の子の意匠の「ミルクキャラメル」(1929)が子どもたちに親しまれた。



ホッとするとときを
食品事業のスタート「明治ココア」発売
1926

当時の事業多角化の柱の一つである食品事業は、ココアの製造から第一歩を踏み出した。



戦前の日本を代表する
練乳商品
「明治メリーミルク」
1921



電車内広告など積極的な宣伝活動を展開。ビタミンB₁を発見した鈴木梅太郎博士からは「外国製品にも劣らない」とのお墨付きも。



アイスクリーム事業を本格スタート
1924

京橋の仮工場からスタート。その後、本所区亀沢町(現・墨田区緑)に両国工場を新設。百貨店などの高級店で販売された。



お菓子文化を
発信するPR誌
『スウィート』発刊



育児用粉ミルクのルーツ
「パトローゲン」誕生 1923

ビタミンB₁(オリザニン)を日本で初めて添加。鈴木梅太郎博士が指導した糧食研究会で開発された。



両国工場で
「明治牛乳」
誕生 1928

両国工場のミルクプラントで生乳を処理して販売開始。発売当初わずか7軒だった「明治牛乳」販売店は、1年後に35店、2年後には54店と順調に増えていった。



初期の「明治牛乳」

欧米での視察体験から、相馬半治は、広告の重要性を認識しており、活発な宣伝活動を展開していた。その一環として1923年に発刊されたのが季刊誌『スウィート』。当時はまだ珍しい企業PR誌だったが、商品の紹介だけでなく、当時活躍していた文化人の作品を掲載するという編集方針が斬新だった。寄稿者の中には川端康成、菊池寛、芥川龍之介、志賀直哉、小川未明などといった著名な作家や画家の名前も。大正時代のモダン文化を反映した画期的な雑誌であった。